

ずいそう

勝手に松本隆論

岩本英司



1980年春、♪えくぼの秘密あげたいわ〜♪と歌う爽快なデビュー曲『裸足の季節』で中学校に入学したばかりの筆者を虜にしたのが九州は久留米出身の松田聖子さんでした。

『青い珊瑚礁』『風は秋色』『チェリーブLOSSAM』『夏の扉』と続き、6枚目のシングル『白いパラソル』で初めてタッグを組んだ作詞家の松本隆さんは、松田さんの楽曲でその後、ヒット曲を連発していくことになります。24曲連続オリコンチャート1位を記録した松田さんの楽曲のうち松本さんの作詞は実に17曲。80年代前半のきらびやかな歌謡界における黄金コンビと言えるでしょう。

1. 田舎から街を見る

その松本さんの音楽界における経歴は、ロックバンドのエイプリル・フール、そしてはっぴいえんどのドラマーとして始まります。特にはっぴいえんどではほとんどの楽曲の作詞も手掛け、大滝詠一さん、細野晴臣さんという二枚看板を支えています。

東京に生まれ育った松本さんがはっぴいえんど時代に手掛けた作詞には、幼年期に遊び回った土の残る東京が1964年開催のオリンピックを契機に様変わりしていく中で味わった喪失感を垣間見ることができま

す。♪紙芝居屋が店をたたんだ後の路地裏はヒーローでいっぱい♪(花いちもんめ)といった具合です。

東京という「街」に身を置き、そこから見える風景を綴ったはっぴいえんど時代。松本さんは後に「自分のための詞をフリーな状態で書くことをメンバーが許容してくれた」(『はっぴいえんど伝説』より)と述懐しています。文学少年として蓄えた言葉の数々。それらを用いてフリーに書いた歌詞には難解な部分も少なくなかったように感じます。ご本人もそれを意識されたことでしょうか。

解散後、ヒット曲を出すことが至上命題とされる歌謡界に身を投じた松本さんは力点を少しずらし、「田舎」から「街」を見ていくことによって聞く者に分かりやすく心象風景を提示していくことになります。その代表作と言えるのが『木綿のハンカチーフ』(太田裕美さん)、『制服』(松田さん)、『卒業』(斉藤由貴さん)などといった楽曲です。

2. 『木綿…』と『卒業』を比べて

今回、この〈ずいそう〉の執筆に当たって編集委員の方から頂いた「何を書いても良い」とのお言葉に甘え、『木綿のハンカチーフ』と『卒業』という二つの楽曲の共通項を見いだすことで松本さんの世界観をより立体的に見ていく「勝手に松本隆論」を書いてみたいと考えました。しばしお付き合いのほどを。歌詞カードを見ながらお読み頂ければ、より言いたいことが伝わるかと思えます。

まずは1975年12月に発売された『木綿のハンカチーフ』。太田さん4枚目のシングルです。

登場するのは田舎を離れて東に向かい到着した都会で暮らす「僕」と、田舎にとどまった「私」。時間が過ぎていく中で都会の絵の具に染まっていくことを自覚し、「変わっていく僕を許して」、そして最後には毎日愉快地暮らす場所から「僕は帰れない」と訴えます。

一方の私は、「草に寝ころぶあなたが好きだったの」と告白しながらも、都会で過ごす彼に「体に気をつけてね」と気づかう健気さも忘れません。やがて2人の



関係が元には戻らないことを感じた瞬間、「最後のわがまま」として「涙拭く木綿のハンカチーフ下さい」とねだります。

離れていても好き合っていたであろう2人が都会と田舎というどうにもならない距離と時間が過ぎていく中で、心が変化していくプロセスを描いた楽曲は、当時どのように受け止められていたのでしょうか。小学1～2年だった筆者が真正面から受け止めるにはまだ幼すぎましたが、太田さんの透明感ある歌声に乗せたそれは、これまでの歌謡曲とは一線を画するものであったのであろうと推察されます。

そしてほぼ10年の時を経て、1985年2月に斉藤さんのデビュー曲として発売されたのが『卒業』でした。

下級生たちに制服の胸のボタンをねだられるモテモテの彼は、卒業後に東京行きが決まっています。ただ大人になりきれないのでしょうか。「机にイニシャルを彫る」ような行為に出ます。そんな思い出を刻む行為について彼女は「心だけにして」とつぶやきます。そしてこれから出て行く東京で変わっていくだろう彼のことを「あなたの未来は縛れない」と言って送り出しています。

高校時代を一緒に過ごした彼と離ればなれになることが決まっても、「卒業式で泣かない」ほどの気丈さを持っている彼女ですが、「でももっと悲しい瞬間に涙は取っておきたいの」と本音を漏らします。離ればなれになることが決まっている卒業式以上の悲しいこと。当時アイドルと呼ばれる存在の中で独特の雰囲気を持っていた斉藤さんの歌声に乗せて、何か予見している点がこの曲の大きなポイントだったといえるのではないでしょうか。

3. 時系列を逆転させてみた

二つの楽曲に出てくる男女二人を筆者は同一人物と捉え、さらに時系列を逆転させ、『卒業』の後に『木綿のハンカチーフ』が歌われたと仮定してみました。そうすると、10年という時を経て描かれた二つの物語が不思議とつながっているような気になってきました。

彼は東京に出てきても、田舎に残してきた彼女のことを思い「華やいだ街で君への贈り物を探すつもりだ」（木綿）と意気込んでいますが、前述したように既に

彼女は「あなたの未来は縛れない」（卒業）と、彼が都会の生活の中で変わっていくであろうと見越しています。

それでも心のどこかでいつかは彼が帰ってくることを彼女は信じていたのでしょうか。「僕は帰れない」（木綿）と告げられると、それまで気丈に振る舞っていた彼女は、一気に感情を抑えることができなくなり、涙拭く木綿のハンカチーフをねだるのです。

これこそが、斉藤さんの口に乗せて歌われた卒業式以上の「もっと悲しい瞬間」の真相だったのではないだろうか。二つの楽曲の時系列を逆転させてみて、そう思うに至った次第です。

最近はyoutubeなどで昔の楽曲も手軽に聞くことができる便利な時代。若いころに慣れ親しんだ名曲の数々も改めて聞いてみると、当時は見過ごしていたことに改めて気づかされたり、新たな発見があったりするものです。



イラスト：かわうそ部長